

平岡いきものはっけん隊 隊報

2016

春

創刊号

季刊 湘南自然誌 Vol.1

創刊記念対談

岸 一弘 (茅ヶ崎野外自然史博物館顧問)

×

「幼児教育における自然体験の意義」

堀田 佳之介 (平岡幼稚園副園長)



ナミテントウ



画：こやま あゆむくん 『生きものだいしゅうごう』

P1

佳之介先生より
ごあいさつ

P2-6

創刊記念対談

P7-8

2016.1-5
生き物発見記録

P9-10

はっけん隊の
お約束

P10

ふしぎはっけんコラム
アおいたのふしぎ

P11

絵画投稿コーナー
おえかきひろば



2016年4月11日 桜満開の平岡幼稚園

【ごあいさつ】

平岡幼稚園の在園児・卒園児・教職員による「平岡いきものはっけん隊」が平成28年3月に発足し、早くも3カ月が経ちました。この隊報は、隊員の人々がみつけた生き物の記録と、地域の自然を知るための情報誌です。身近な自然を見つめなおしつつ、地域の自然環境がより良くなっていくように、みんなで隊の活動を盛り上げていければと思っています。

平岡いきものはっけん隊・呼びかけ人 平岡幼稚園副園長/ 堀田 佳之介

【平岡いきものはっけん隊の活動目的】

① 地域の自然をまもるために

私たちのいのちと暮らしは“自然の恵み(生態系サービス)”を受けることにより成り立っており、“地域の生物多様性”はそれを支える基盤です。豊かな自然の恵みを未来の世代まで永続的に受け続けるには、地域の生物多様性を守りつつ、より豊かなものとしていかななくてはなりません。そのためには、私たちが地域の自然を知り、理解していくことが必要です。この隊は、園児・保護者・教職員をはじめ多くの人と一緒に身近な自然に親しみながら、地域の自然を皆の力で守っていくことを目的とします。

② 園児の教育のために

幼稚園教育要領や学校教育法にも、自然環境への関わりの必要性が記されているように、子どもの健全な心身の発達・成長には、幼少期に多様な自然と関わり、多様な体験活動をしていくことが必須です。しかし、現代社会において子どもたちの自然体験は質・量ともに低下の一途を辿っています。この隊は、次代を担う子どもたちが、さまざまな自然とのふれあい活動をとおして、自然に親しみながら、豊かな心(感性・人間性)と健やかな身体の育成をはかれるようにしていくことを目的とします。



幼児教育における
自然体験の意義



堀田佳之介 (以下 堀田) > この度は平岡いきものはっけん隊名誉顧問に就任していただき、ありがとうございます。

また、隊報「湘南自然誌」創刊記念対談をお引き受け下さり感謝しております。「創刊記念にふさわしい先生を」と考えた結果、やはり岸さんしかいないと思いました。

「幼児教育における自然体験の意義」と題し、この対談を読めばこの隊の設立趣旨も理解してもらえるような、そんな対談が出来たらと思います。それではよろしくお願ひします。

岸一弘 (以下 岸) > よろしくお願ひします。

堀田 > 平岡幼稚園では数年前からジオトープを設置したり、自然観察会を開催したり、園児教育に自然体験を組み込みたいと考えて様々な取り組みを進めています。今年3月には「平岡いきものはっけん隊」を結成し、園児だけでなく保護者の方々も気軽に自然に触れ合えるように運営していこうと考えています。

残念ながら教育界において自然体験・環境教育は優先順位が低いのが現状です。昆虫類の生態の研究のみならず、長年に渡り自然観察会を開催していらっしゃる岸一弘さんに、自然体験の重要性についてお伺いしたいと思います。

なぜ自然体験が重要なのか？

岸 > なんで自然体験が大事かっていう話ですね。まずは一般論的になっちゃいますが、一番はやはり自然に触れることで感性が研ぎ澄まされて豊か

平岡幼稚園 副園長

堀田佳之介



岸一弘

茅ヶ崎野外自然史博物館顧問
平岡いきものはっけん隊名誉顧問

1990年から11年間、茅ヶ崎市文化資料館で身近な自然の面白さ、不思議、大切さを伝えるための自然観察会を主催し、茅ヶ崎市内の生物調査をもとに特別展を開催。2001年に仲間とともに、「野外まるごと博物館」をテーマとした茅ヶ崎野外自然史博物館の活動をはじめ。日本生態学会、日本鱗翅学会会員、茅ヶ崎野外自然史博物館顧問。著作に「虫たちはどこへいくのか」「いろいろたまご図鑑 (共著) (ポプラ社)」「イモムシ・ケムシぞろぞろ大図鑑 (共著) (PHP) などがある。

になるんですよ。そこが小さい子にとって大事かなと。格好良く言うと芸術性に繋がると思うんですよね。

あとは自然を体験することで、生き物に対するやさしさみたいなものが育つと思うんです。自然の仕組みとかが分かって生き物に対するやさしさが身に付けば、人間も生きもののひとつですから、人に対してのいたわりとかそういう感覚ももっと出てくると思うんですよね。そういう感覚が育てば、例えばいじめなんか少し減ってくるんじゃないかと。もちろん自然体験をすればいじめがすべて解決する訳じゃないですけどね。

あと今は「死」ってものに対する感覚が乏しいまま大きくなっちゃう。かわいそうですけど、虫とかカエルとかカナヘビだとか殺しちゃったりするじゃないですか。そうするともうかなり小さな頃から死んでいるものを理解出来ると思うんです。そうやって実際に殺してしまったらね、体験的に死を理解するから、

簡単に人を傷付けたりする子は少なくなってくるんじゃないかな。今、なんかちょっとやってみたら大怪我させちゃったとかそういう事件がありますけど、本当に憎しみがあってやってるんじゃないくて、死が分かってないからだと思うんです。そういうのを減らしていくためにも自然体験はすごく大事だと思います。

あとは自然を体験することによって、自分の住んでるところに対する愛着っていうのかな、広く言えば郷土愛みたいなものも醸成される。もちろん歴史とか民俗とか学んでいくことも大事だけれども、あまり小さな子にそれは無理だと思う。だったら入り口はやっぱり自然。深い知識がなくても体験は出来ますから。

堀田 > 知れば知るほど愛着って湧いてくるものですよ。

岸 > ええ。身近な環境を小さいうちから知っていれば、ちょっと自然が壊れたら気付くじゃないですか。そうするとそれを残念に思ったり、なんかならないかなあって思いにも繋がっていく。そういう人が増えていけば自然が壊されないで済む部分が増えてくると思うんですよ。もちろん土地の所有権の問題とかあってどうにもならないことはいっぱいありますけど。その土地でどんな生き物が暮らしているか知っていれば、元々いなかったものが入ってき

たらすぐ分かる。そうしたらその入ってきた生き物が環境にどう影響を与えてるのか、子どもでもその問題点を理解出来ると思うんです。それならそういうことはしない方がいいよって自然に考えるようになってくる。一人ひとりがそういうことに気を配ればそれだけでも自然が壊れていくのを減らせると思います。

堀田 > なるほど。生き物へのやさしさが人へのやさしさに繋がり、感性が豊かになる。さらには郷土愛のようなものも醸成されると。いい話をありがとうございます。

では少し具体的に、自然と触れ合う経験をどう作っていったらいいのかお聞きしたいと思います。平塚はまだある程度自然が残されてはいますが、子供たちが虫を追っかけまわしてる光景はなかなか見られなくなってます。やはり大人がある程度誘導するとサポートするとかしないとダメなんではなか…

自然と触れ合う経験をどう作るか？

岸 > これはもう大分前から起きちゃってるんですけど、子どもの世界で異年齢の繋がりがあまりないじゃないですか。ほとんど同年齢での付き合いだから、年長の子に自然体験の楽しさを教えてもらうということが無いんですよ。そういうのがあれば楽しさを自然に学んでいったり体験出来たりするんだけど…

それが出来ないで大人がその代わりをせざるを得ない時代になっちゃってるんですね。

だから、平岡幼稚園の場合だと堀田さんと幼稚園の方がセッティングしてあげないと、放っておいても体験出来ない。それはもう親世代が体験してないから。自分が体験してないことを子どもに体験させるのは難しい。親子でどこかに一緒に行って体験するならいいんですけどね。観察会とかに親子で来ていただいたりするとそこで楽しさを味わってそこから広がっていく可能性があるんだけど、なにかそういうきっかけがないと、なかなか自然体験の楽しさは感じられないかもしれないですね。



堀田 > はっけん隊では、今おっしゃられた「異年齢の繋がりが出来ることも期待して、卒園後も隊員資格がある形にしようと考えてます。卒園児が小学生中学生になって「ミニ昆虫博士」になって戻って来てくれたらなあ。

岸 > それすごく大事ですね。年長の子が積み重ねた自然体

験を、もっと小さい子に伝えていく。「これ面白いよ」って。そうすると自然と経験が継承されていくようになるんじゃないかな。

堀田 > 長く続けていけばそういう成果が期待出来ると。

岸 > そうですね。川崎の生田緑地の例ですが、あそこはもう何年も小学生対象の自然体験プログラムを継続し、中学生になってもOBのような形で講師のサポーターのようにして付いてくれて、高校生くらいになると準講師くらいになっている。今度は新しい子どもを教える立場に回っていくんですよ。そうやって循環していくとどんどん繋がっていくんじゃないかなと思うんですよ。

堀田 > それはかわさき自然調査団（川崎市域の自然調査に取り組むNPO法人）の活動のひとつなんですか？

岸 > はい、そうです。

堀田 > そこには幼稚園児も参加しているんですか？

岸 > プログラムの参加は小学校からになっていますね。湿地や田んぼでの作業があるので、多分安全面を考えてのことだろうと思うんですけど。あと幼稚園児くらいだとあんまり複雑なプログラムは入れられないじゃないですか。

堀田 > 小学生くらいだとこうやったらいいとかいろいろ考えやすいんですけど、やはり幼稚園児対象だとやり方が難しい…

岸> 保護者の方が参加してくれるなら園児でも割りと色々出来ると思うんですね。

堀田> そうですね。それからもうひとつ、「これこれこういう自然教育をした結果、子どもたちがこう変わりました」というような形で結果を残すのが、園児の場合すごく難しいんです…

岸> それはあまり短期間で見なくていいと思いますよ。その子が体験したことの効果がすぐに出る場



合もあるとは思いますが、何年か経ってその体験がいい果実になるっていうかね、それくらいでいいんじゃないでしょうか。幼稚園に満たないくらいでもいいんです。出来るだけ小さな頃から自然に触れさせてあげることで、格好良く言えば、これから人格を形成していくうえで大きな財産になっていくと思うんですね。

堀田> 園の内外で園児たちがいろんな自然体験が出来るようにしてはいるんですが、ひとりひとり見てみると楽しんでる子もいればただ見てるだけの子もいる。それでも大なり小なりそういう体験をしたってことが大事なんじゃないかと思って続けているのですが。

虫が嫌いと思い込んでるだけの子ども

岸> そうです、それが大事なんです。私は幼稚園児対象の観察会はあまりやったことがないので小学校低学年くらいの例で言いますが、やはりものすごく生き物が好きでやたら詳しい子もいれば、生き物嫌い・怖いみたいな子もいるんです。それでも2時間くらいやってると「嫌いだ嫌いだ」言ってた子でも結構大丈夫になってきたりします。なのでそういう機会を与えるってことが大事なんです。多分本当に生理的に生き物が嫌いな子っていると思うんです。だけど、そもそも触れ合う体験がなくて「嫌い」と思い込んでるだけの子もいるんです。「虫は怖い・

毒がある」なんてお父さんお母さんがそう思っちゃってるのかなあ、子どもも同じように思い込んでる。でも実際に生き物を観察してみれば、危ない生き物はいるけれどもそんなに多くはないってことが分かるじゃないですか。しかも危ないと言ってもどうすれば危ないか、どうすれば安全かってことを知ってればそんなに怖がらなくてもいいって分かるんですよ。そうすると「結構大丈夫だった」、「意外に好きになった」という子が出てくるので、やっぱり体験の場を沢山作るってことが大事ですね。

堀田> そのためにも園児とのトンボやセミの調査を企画してるんですけど…私なんかはどうしても自分が夢中になってしまって子どもそっちのけになってしまったり…(笑)

岸> 堀田さんのしてることはレベルが高いからなかなか着いて来れない(笑)でも夢中になって調査していいんです。そうやって一緒に体験をさせてあげる大人が必要なんです。ただ、小学校中学校の観察会をやっていると分かるんですが、同じ年令でも子どもたちの生き物の知識レベルは全然違うんですよ。そこはある程度合わせる、それぞれの子が興味を持てる形の接し方をしてあげるようにしています。これは子供に限らないと思うんですが、生き物を面白いと感じるのは生態・暮らしぶりの多様性を感じた時が多いですね。人間の感覚では考えられないような生き方をしている生き物って結構いるじゃない

ですか?そういうことを紹介してあげるとすごくビックリしてくれて関心を持ってくれたりするんです。ただ「これは何々です」って生き物の名前を言うんじゃないくて、これはこういうものを食べてるとか、こうやって逃げるんだとか、そういうようなことを言うと子どもたちはすごく興味が湧くみたいです。

堀田> そのあたり私も勉強しなくちゃいけませんね(笑)

岸> そんなに高度なことでもなくてもいいんで、たとえば種によって違う暮らしぶりの面白さを見せてくれるとか、そういう先生が育ってくれるといいですね。また、保護者の中にもそういう素質のある人がいるかもしれませんね。お父さんお母さんにももっと活躍してもらっていいんじゃないでしょうか。

堀田> はい、そうですね。保護者、教員を巻き込んで হচ্ছেん隊を盛り上げていきたいと思っています。

次に、私が実際に現場で子どもと接する中で感じた疑問についてお聞きしたいのですが。

岸> はい、どうぞ。

堀田> 観察会などで、子どもが捕まえた虫をどうしても持ち帰りたいと言い出した場合どうしたらいいでしょうか?私なんかは「かわいそうだから逃がしてあげよう」って言ってしまふのですが。

「虫を持って帰りたい！」と言われたら

岸> それはむしろ、いくつかは持ち帰らせてあげた方がいいですよ。うまく餌をあげられる子もいますが、大概すぐに死んでしまいます。そこで「なんで死んだんだろうね」って一緒に考える。「家ではすぐ死んでしまうね、虫は外で暮らした方がいいよね」ってことも伝えられる。

堀田> 「ぼくならうまく飼える」っと思ってるのに無理に持ち帰りを禁止すると、子どもは納得いかないまま断念するだけで何も学べない。先に答えを与えてしまわずに…

岸> 希少な種でない限りは持ち帰らせて殺させるといふか…そこまで体験させた方がいい。

堀田> 自分で飼おうと思って餌をあげたりいろいろやってみたけれども、でも死んじゃったとか、そういうのもいい経験になる。

岸> そう、非常に貴重な経験ですね。本当に飼いたいのであれば、なんで死んだのか、死なせないためにはどうしたら良いかを考えさせて、もう一回飼ってみる。

堀田> なるほど、それなら生態もよく分かりますね。

岸> たしかに小学校などでも、あとのフォローが難しいから「捕らずに逃しましょう」ってなりがちなんです。でもお父さんお母さんが協力出来るんだったら、最終的には殺してしまうことになってもいいから飼ってみる方がいい。

堀田> つい「逃がしてあげよう」って言うのはもうひとつ理由がありまして、生き物の人為的な移動・移入が地域の生態系を壊してしまう可能性があるじゃないですか？はっけん隊としては採集は原則禁止にした方がいいんだろうか？どうルールを作っていくか今悩んでいるところなんです…

岸> それは「もしうまく飼えてその後もういいやつになったら、必ず元の場所に戻してあげましょう」このルールを徹底したらいいと思います。

堀田> 家に持って帰ってしばらくしたら満足しちゃって、すぐそこで放してしまうのはまずい。

岸> それはやめよう、と。そこですね。持って帰りたいなら死ぬまで飼う、もし飽きたら元の場所に戻す、というルールを徹底したらいいです。

堀田> もう訪れることのないであろう旅行先で捕まえて持って来ちゃったら…（笑）

岸> それはもう最後まで飼うとか標本にするとかですね。



愛猫のクロちゃん

岸> そうなんです。餌だけじゃなく温湿度などという条件が揃えば飼育出来るのかが分かってくる。飼うといろんなことを知ることが出来ます。

堀田> うーん、そこまでは思い及びませんでした。

堀田> そうですね。ルールとして持ち帰り禁止も考えていたのですが、飼ってみるのも大事ですね。勉強になりました。

もうひとついいですか？

岸> はい。

堀田> 園庭などで子どもたちがアリを踏んで遊んだりするんですが、ああいうのってそのうち（残酷さに）気付くんですかね？ついつい「そういうことしたらかわいそうだよ」って言っちゃうんですけど…

「かわいそうだよ」って言う前に

岸> それはですね、「かわいそうだよ」って言う前に、踏んだらどうなるかをそのまま観察させるんですよ。やがて死んじゃったら「死んじゃったよね」って言ってあげる。「これいつもやってるとアリさんいなくなっちゃうよね」って言ってあげてもいい。そこで命があるってことを理解してもらおう。

堀田> そういう言葉かけで（命の大切さの）気付きが生まれるかもしれない。

岸> そうですね。かわいそうだけれどもアリさんには少し犠牲になってもらって、その子の教育の材料になってもらっていいのかなと思います。昆虫はたくさん産んでいっぱい死ぬという生き残り戦略なので、ある程度人間が殺してしまっても個体群の維持には全然問題がありません。よほど珍しいのは別ですけどね。

堀田〉子どもって残酷なことをする時期ってありますよね。そういうのって無いよりはあった方がいいのかなとも思います。

岸〉そうだと思います。そういう体験をする中で自分で生死を学んでいく。ただ潰すだけのような段階から少し成長したら、さらにアリが餌を運ぶルートを観察したり、サムライアリが他のアリの巣の幼虫を持ってっちゃったりするのを見たり、そういう観察に持っていったっていいんじゃないでしょうかね。

堀田〉イモムシを潰してアリさんの通り道に置いておくとうなるか？というような実験をするのはどうですか？

岸〉いや、わざとはやらない方がいいですね（笑）アリをしばらく観察していれば餌を運んでいる姿には必ず出会うと思います。虫だけでなく植物の種を運んだりすることもあるんですよ。餌にもなるんだけれども、運んだ先で発芽したりして植物の分布を広げることになったりもしてる。これはちょっと幼児には難しいかな（笑）とにかく、わざと何かしなくても観察をしてるだけでいろんなことが見えてきますよ。

堀田〉なるほど。アリを潰したりする体験から「生死」を学びつつ、それをきっかけに生態の観察まで

持っていければ、さらにいろんなことを知ることが出来るということですね。

岸〉昔は年長の子がそういうことを教えてくれたんですけどね。

堀田〉私達大人が自然体験の場を作り、生き物の不思議・面白さを教えてあげないとイケませんね。

岸〉平岡幼稚園の園庭フィールドを最大限活かしたいところですね。幼稚園に来れば毎日自然体験が出来るなんてところはそうないと思うんですよ。

堀田〉平岡の園児はトンボのヤゴ・バッタ・テントウムシなど、平気で触れる子が明らかに多いんです。ただなかなか園児たちが積極的に遊ぶ場にはなっていないなあというのが現状です。先生なんかがあると「こんなのいたよ！」って持ってきてくれたりするのはのですが…

大人の教育はもっと大事

岸〉先程も言いましたけど、自然教育の面でも子どもをサポートしてあげられる先生・お父さんお母さんが育つといいですね。子どもの教育も大事ですけど大人の教育はもっと大事です。

堀田〉そうですね。そのためにも私自身さらに勉強していかななくてはならないと感じました。今後も自然から学びつつ、岸さんからいろいろ教えてもらいたいと思ってます。岸さんには是非、はっけん隊の先生として隊主催の観察会などに来ていただきたいと考えてます。その際はよろしくお祈りします。

本日はこの対談のためにお時間を割いていただき、本当にありがとうございました。

岸〉ありがとうございました。
次は観察会で会いましょう！

（5月27日、茅ヶ崎市南湖、岸先生宅にて）



園庭池の掃除風景
父母の方々もビオトープの管理に協力してくれています。

創刊号にふさわしいためになるお話をたくさん伺うことができました。岸先生に感謝です。

次号以降も自然に造詣の深い先生方の対談やインタビュー、コラムなどを掲載していく予定です。ご期待ください。

創刊記念対談 岸一弘 × 堀田佳之介

『幼児教育における
自然体験の意義』

2016年1月～5月 隊員のみんなが集めた生き物の記録

本誌『季刊・湘南自然誌』では、紙面の都合上園児隊員が報告してくれた記録と、特筆すべき記録を優先して掲載していく予定です。
隊員のみんなで湘南地域を中心とした生き物の記録を残し、豊かな自然環境の保全に役立てていきましょう。

※最終的に2016年のすべての記録を『別冊・湘南自然誌』（年一回発行予定）にまとめて掲載し、そちらを正式な発表として扱います。

5/7 ハルゼミ調査・稲村ヶ崎より

◇チョウ目

- ベニシジミ**：平塚市土屋琵琶 4月 小山瑞穂・芽依・歩夢（写①）
モンキチョウ♀：平塚市土屋琵琶 4月 小山瑞穂・芽依・歩夢（写②）
ツマグロヒョウモン幼虫：平塚市土屋琵琶 4月 小山瑞穂（写③）
アサギマダラ：箱根町湯本 5月 堀田佳之介
 →林道上を滑空しているところを目撃。長距離を移動する蝶で有名。
クロアゲハ幼虫：平塚市中原 5月 新井柚稀（写④）
クロハネシロヒゲナガ?：平塚市土屋琵琶 4月 小山瑞穂（写⑤）
 →ヒゲナガガの仲間は触角が長く、とても面白いです。
 写真のピントがいまいちで断定はできないので、「?」としました。
ミノガの一種（チャミノガ?）：平塚市日向岡 4月 浜野紗綾花（写⑥）



◇バッタ目

- ヤブキリ幼虫**：平塚市土屋琵琶 4月 小山瑞穂・芽依・歩夢
 平塚市土屋琵琶 5月 小山瑞穂（写⑦）
コバネヒメギス幼虫：平塚市土屋琵琶 4月 小山瑞穂（写⑧）
ツチイナゴ：平塚市湘南平 5月 西部浩美・光咲（写⑨）



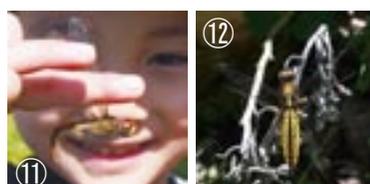
◇トンボ目

- アジイトトンボ**：小田原市飯泉（酒匂川） 5月 堀田来佳・ゆら・佳之介
ホソミイトトンボ：小田原市飯泉（酒匂川） 5月 堀田来佳・ゆら・佳之介（写⑩）
アオモンイトトンボ：小田原市飯泉（酒匂川） 5月 堀田来佳・ゆら・佳之介
クロスジギンヤンマ：♂小田原市飯泉（酒匂川） 5月 堀田来佳・ゆら・佳之介
 二宮町二宮（吾妻山公園） 5月 堀田来佳・ゆら・佳之介
ウスバキトンボ：♂真鶴町真鶴 4月 ハルゼミ合同調査参加者（写⑪）
シオカラトンボ：小田原市飯泉（酒匂川） 5月 堀田来佳・ゆら・佳之介
ハラビロトンボ：♀平塚市土屋琵琶 5月 小山瑞穂（写⑫）



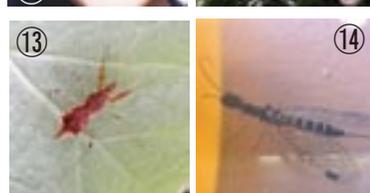
◇カメムシ目

- アカマキバサシガメ**：平塚市土屋 4月 小山瑞穂・芽依・歩夢（写⑬）
ハルゼミ：複数♂鳴き声（合唱）埼玉県比企郡滑川町山田
 （国営武蔵丘陵森林公園） 5月 西部啓和・浩美・颯太・光咲
 →国内では一番早く出現するセミです。神奈川県では絶滅した産地が多く、2015年以降、平岡幼稚園で神奈川県内の生息状況を調べています。



◇アミメカゲロウ目

- ラクダムシ**：♂ 真鶴町真鶴 4月 堀田佳之介（参考写⑭）
 ♀ 茅ヶ崎市芹沢 5月 富岡誠一
 ♂死体（電話ボックス内で発見）真鶴町真鶴 5月 堀田佳之介
 →マツやスギなどの樹皮下に潜んで生活をしています。もともと数は少なく、神奈川県昆虫誌（2004）によると真鶴町での記録はありません。



◇コウチュウ目

- ニワハンミョウ**：秦野市羽根（菜の花台）5月 堀田佳之介
アオオサムシ：秦野市鶴巻（ハネガコース）4月 西部浩美（写⑮）
 平塚市土屋琵琶 2016.5.5 小山瑞穂（写⑯）
ラミーカミキリ：平塚市岡崎（平岡幼稚園）5月 小林優樹（写⑰）
ベニカミキリ：平塚市土屋琵琶 5月 小山歩夢・芽依・瑞穂（写⑱）
サビキコリ：平塚市土屋琵琶 5月 小山瑞穂（写⑲）
 →身近に見られる大型のコメツキムシ
トゲヒゲトラカミキリ：秦野市寺山（ヤビツ峠付近）5月 堀田佳之介
ナカジロサビカミキリ：平塚市土屋琵琶 4月 小山瑞穂（写⑳）
リンゴコフキゾウムシ：秦野市寺山（ヤビツ峠）5月 堀田佳之介・富岡誠一
 →緑色の光沢のあるとても美しいゾウムシです。（写㉑）
ヒガシマルムネジョウカイ：平塚市土屋琵琶 4月 小山瑞穂（写㉒）
アカハネムシの一種：平塚市土屋琵琶 5月 小山瑞穂（写㉓）
ダンダラテントウ♂♀：平塚市土屋琵琶 5月 西部浩美・颯太・光咲（写㉔）



◇ムカデ綱ゲジ目

- オオゲジ**：大磯町東町 5月 中村舞（写㉕）
 →足の長さ込で手のひらサイズ！？気持ち悪かった…とのこと。

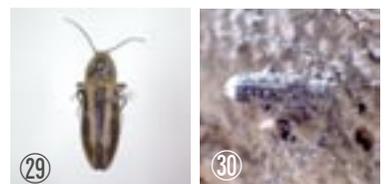
◇鳥類

- ツツドリ**：（鳴き声）秦野市寺山 5月 堀田佳之介
 →「ボン、ボン、ボン」と一定間隔で鳴きます。不思議な鳴き声です。
アオバト：（鳴き声）秦野市寺山 堀田佳之介
 →アオバトだけに？「アーオ アーオ」と鳴きます。大磯町の鳥です。
コゲラ：伊勢原市大住台 4月 西部浩美（写㉖）
 →身近にみられるキツツキの仲間。



☆☆☆ めずらしい生き物 ☆☆☆

- ◎**ヒメツチハンミョウ**：♀ 平塚市土屋琵琶 4月 小山瑞穂・芽依・歩夢（写㉗）
 →体液が皮膚につくと水ぶくれになります。触らないようにしましょう。
 ◎**ヒメカンショコガネ**：平塚市岡崎（平岡幼稚園）3月 三木絢翔（写㉘）
 →神奈川県昆虫誌（2004）によると、平地に見られるが、あまり数は多くないとあります。
 ◎**トラフコメツキ**：大磯町西小磯（城山公園）4月 堀田來佳（写㉙）
 →県東部では多いようですが、湘南地域では初記録となるかもしれません。
 ◎**ハイイロツツクビカミキリ**：南足柄市塚原 2月 富岡誠一（写㉚）
 →神奈川県昆虫誌（2004）によると少ない種のようにです。
 ◎**トビイロカミキリ**：秦野市羽根（菜の花台）5月 富岡誠一（写㉛）
 →神奈川県昆虫誌（2004）にて、「それほど多くない」と記載があります。
 ◎**ヒオドシチョウ**：♀産卵中 平塚市岡崎（平岡幼稚園）4月 富岡誠一（写㉜）
 →一時期、湘南地域東部では姿を消したチョウですが、最近になって謎の大復活を遂げた蝶です。幼稚園のエノキに産卵しました。卵は無事に孵化し、たくさんの幼虫が確認できました。



【みんなで集めたトンボのぬけがら（4月～5月）】

- ① クロスジギンヤンマ：3♂13♀（園庭池・こんちゅう池）
- ② ギンヤンマ：1♀（原っぱ池）
- ③ アオモンイトトンボ属の一種：1ex.（こんちゅう池）
- ④ オオアオイトトンボ：1♂4♀（こんちゅう池）
- ⑤ ショウジョウトンボ：49exs.（こんちゅう池）
- ⑥ シオカラトンボ：3exs.（原っぱ池）
- ⑦ オオシオカラトンボ：325exs.（園庭池・原っぱ池・こんちゅう池・むし池・かに池）

平岡しぜんはっけん隊のお約束

① 持って帰るなら最後まで飼う、逃がすなら元の場所に！

本来その種が分布していない地域に生き物を移入させてしまうことは、地域の自然を壊すことになります。また、地域により同種でも地域個体群レベルでの違いがある場合がありますので、生き物の人為的な移動は避けましょう。

しかしながら、野山での観察だけでなく、飼育してみることや標本を作ってみることも良い経験になります。なので隊としては、教育目的に限り持ち帰りは禁止しません。家に持って帰った場合は、責任を持って最後まで飼育するか標本にする、逃がすならもう一度採集した場所に行って放つようにしましょう。

※ 極めて希少な種である場合もあるので、持ち帰る際は念のため佳之介先生に報告して判断してもらって下さい。

② 安全第一！

良好な自然環境ほど、危険が多くなります。安全第一をお願いします。

とは言えむやみに怖がる必要はありません。下に危ない生き物の代表例を挙げておきます。何が危ない生き物なのか？どうすれば危なくてどうすれば安全なのか？を知って、みんなで自然観察を楽しんでいきましょう。



オオスズメバチ

☆ ハチのなかま

スズメバチ・アシナガバチ・ミツバチなど

成虫を見かけたらそーっとその場を離れましょう。手で払うなどすると余計に危険です。刺激をしなければ刺されることはほとんどありません。

ただし、**巣に近づくのは非常に危険**です。絶対にやめましょう。



コアシナガバチ



マムシ

☆ ヘビ

マムシ・ヤマカガシには毒があります。丘陵地の草むらに入るときは、特に気を付けましょう。

！ さわらない

☆ けむし



ヒロヘリ
アオイラガ 幼虫



チャドクガ幼虫

毛があるイモムシの中には毒針毛を持つものがあります、むやみに触るのはやめましょう。

☆ ツチハンミョウ科の仲間

(ツチハンミョウ、マメハンミョウなど)

アオバアリガタハネカクシ

アオカミキリモドキの仲間

ヒメツチハンミョウ

有毒な体液を出す昆虫なので触らないように。



☆ ヨコヅナサンガメ

不用意に触れると鋭い口吻で刺されることがあります。毒はないものの非常に痛いので要注意です。



アオバアリガタ
ハネカクシ



アオカミキリモドキの仲間
(カトウカミキリモドキ)

画像提供：岸一弘

☆ 服装にも注意しましょう

☆ 虫刺されなどを防ぐために、長袖・長ズボンを着用しましょう。
また、スズメバチなどは攻撃対象に黒い色のものを選ぶ習性がありますので、黒い服は避けた方が無難です。

☆ 熱中症にならないために

必ず帽子を着用し、日陰を利用しながらこまめに休憩を取るようしてください。

特にスポーツドリンクなど水分・塩分（ナトリウム）が入った飲料水が熱中症の予防に効果的です（下記コラムも参照）。頭痛・吐き気などの症状が出る前に対処していきましょう。

重症度レベル1

めまい・大量の発汗
筋肉痛・筋肉の硬直

重症度レベル2

頭痛・吐き気・嘔吐
倦怠感・虚脱感

重症度レベル3

意識障害・痙攣
手足の運動障害・高体温

ぼうし

ながそで

ながズボン



「アオバトの陶像」富岡誠一

ふしぎはっけんコラム 第1回 アオバトのふしぎ

まるで南国の鳥のような色彩をしたアオバト。こんな極彩色のハトが身近にいることを皆さんご存知ですか？ 実は大磯・照ヶ崎海岸は日本最大のアオバト飛来地と言われています。夏には毎日のように多くのアオバトが丹沢と大磯を行ったり来たりしています。

なんでアオバトはわざわざ2、30キロも離れた山から海岸まで飛んで来るのでしょうか？

実は海の水を飲みに来ているんです。鳥の中でも海水を飲む種類はほぼアオバトだけと言われていて、波に飲まれる危険をものともせず岩礁に舞い降りて来ます。

ではなぜそこまでしてアオバトは海水を飲まなくてはならないのでしょうか？

私たち人間は汗をかきすぎて塩分が不足すると、水で体内の塩分濃度が下がってしまうのを避けるために、体が水を受け付けなくなってしまうことがあります。こうなると重度の熱中症。場合によっては死んでしまうこともある危険な状態です。なので水分を補給するためには塩分も補給しないといけないんです。これはアオバトも同じ。アオバトは山で塩分がほとんど含まれていない果実ばかり食べて生きているので、どこかで塩分を補給して来ないと果実からの水分も吸収出来なくなってしまいます。だからわざわざ大磯まで飛んで来るんですね。アオバトが暑い季節には海水を飲みに来るのに冬には来ない理由も、おそらく冬はあまり水分を必要としないので、塩分も特に摂らなくていいからではないか？と考えられています。

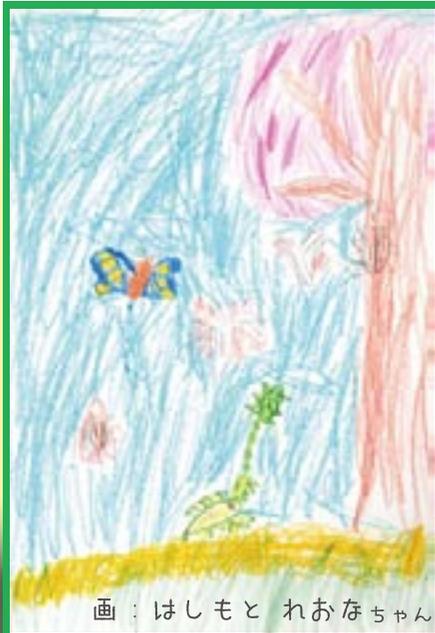
アオバトの飛来は7月8月がピーク。はっけん隊でもアオバト見学会の開催を検討しています。みんなでこの変わった生態を持つ美しいハトを見に行きましょう！（富岡）

おんかきひろば

ひらおか幼稚園
絵画投稿コーナー

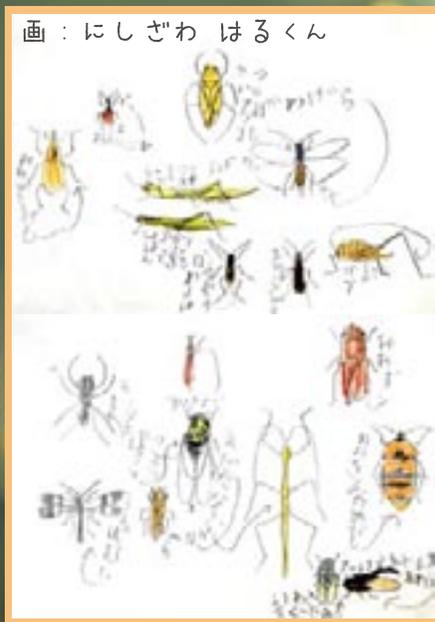


画：はまのさやかちゃん



画：はしもと れおなちゃん

こんちゅう・しょくぶつ
なんでもかいてみよう！
かけたらようちえんに
もってきてね



画：にしざわ はるくん

キタテハ

平岡いきものはっけん隊では、隊員の皆様から身近な生き物の写真と記録を募集しています。発見場所・日時と写真を添えて下記メールアドレスまでお送り下さい。

あるいは平岡いきものはっけん隊掲示板へ投稿お願いします。

<http://6804.teacup.com/hakkentai/bbs/>
ありふれた昆虫・道端の植物、なんでもOK。
種名が分からなくても構いません。佳之介先生などが調べて本誌に掲載していきます。

編集後記

『湘南自然誌』創刊にあたり、岸一弘先生には大変お世話になりました。おかげさまでなんとか発刊まで漕ぎ着けました。感謝申し上げます。

日々佳之介先生と重ねられるプ子編集会議、あれもこれもと浮かぶアイデア。色々盛り込もうと夢は膨らむのですが、なかなか編集が追いつかず…毎月発刊と意気込んだものの、すぐに現実的ではないと気づき隔月刊へ。結局それも厳しく季刊ということに。そんなわけで発刊が大変遅れてしまいましたが、その分充実した内容になったかと思えます。

次号は夏号として6・7・8月の記録をまとめて9月に発刊予定です。お楽しみに。(富岡)